

# 方言

この二年間における「方言」研究に関する論考等は、前回にも増してきわめて多数であり、そのすべてに目を通すこと、また本稿でそのすべてを紹介することなどは、担当者の能力と時間的制約から、不可能に近いと思われる。したがって、今回本稿で紹介させていただくのは、まったく担当者が見ることのできた範囲内での選択であることを、先ずお断りしておきたい。

## 一、課題と方法

日本方言研究会創立のきっかけを作られた東条操先生の、生誕一〇〇年を記念して編集した、日本方言研究会編『日本方言研究の歩みへ論文編・文献目録』（90・6、角川書店。編集委員代表平山輝男、編集委員Ⅱ加藤和夫・佐藤亮一・真田信治・沢木幹栄・中本正智）が刊行された。「論文編」は日本方言研究会の世話人・幹事を中心とし、協力関係者を加えた二三名が、部門別と地域別とに分担してそれぞれ（「方言研究史」を試み、日本の方言研究が学問として発展してきた足跡を記述し、さらに今後の課題を提示した。「文献目録」は【書目】と【論文】とに分け、それぞれについて総記と地方とに分類してある。この分類体裁は、東条操「方言と方言学」（改訂増補版、一九

## 大島一郎

四四、春陽堂）に、付録一、二として添えられた「刊行方言書目」と「方言論文目録」の方式にほぼ準じ、これと、その後の目録等を校合し、江戸時代後期から昭和六三年までについて収録したものである。かつて東条操先生によって創始された「方言文献目録」の整理が、その後の斯学の研究発展に果たした功績は言うを待たないほどであり、今日の研究の隆盛が事実を物語っている。今後、研究者は本書によって、今日までの方言研究の発展のあとをたどり、さらにこれからの新しい研究の指針と問題点を考えることが出来るであろう。なお、本書の刊行を機に、日本方言研究会の永年の活動とその功績に対し、平成二年度第九回新村出賞が贈られたことはまことに喜ばしい限りである。

藤原与一「日本語方言分派論 方言「区画」（分派）とその系脈」（90・2、武威野書院）は、永年にわたって蓄積された調査資料を駆使しての著者独特の持論の展開であり、その方法論を含め、広い視野からの方言観に圧倒されるものを感じるのは、筆者だけであろうか。教えられるところの多い論述である。また、同氏「中国四国近畿九州 方言状態の方言地理学的研究へ研究叢書92」（90・10、和泉書院）は、昭和三二年に発刊された「英文著の和文刊そのことを図つ

て、本文の和文原文を印刷することゝして刊行されたものである。

杉藤美代子を研究代表者として継続している、文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」は第二・三年目に入つて、その組織の多岐である点ユニークであり、毎年数回開く研究会やシンポジウムなどもきわめて活発であり、各班毎の研究成果の交換によつて切磋琢磨している。特に韻律に関する研究はその方法論から多くの問題を抱え、これを開発するために、音声学だけでなく器械実験による分析、音響学・声楽・演劇その他の関連する最先端の科学を総動員して討議し、悩み、その成果を積み上げつつ新しい視点をつかもうと懸命である。また、国語教育や日本語教育にかかわる韻律に関する研究や応用でも、従来にはなかつた科学的研究をふまえた成果の見通しが得られそうであり、その総合的成果が期待される。

なお、各班毎に中間発表の成果を公開しているが、それぞれに充実した研究内容であり、関係の諸研究に寄与するところ大である。方言の研究に関連しては特にイントネーションの研究、その分析と記述に期待が持てる。一方、無型アクセントの韻律に関する研究、重要な方言の音声を通項目について精密に録音し、そのCD化に関する技術開発とその研究を含め、そこから発展する多くの成果が期待されるものである。

徳川宗賢・真田信治編「新・方言学を学ぶ人のために」(91・2、世界思想社)は、これからの方言研究をどう進めて行くべきか、その課題はどう設定すべきか、等の視点を多面的に示しているものと思う。本書は徳川宗賢氏の遺暦を記念する意味を込めて、氏を中心とする「阪大社会学方言学」のほぼ全貌を示しうる(本書「あとがき」

による)という自負がそのまま生きているような、密度の濃い内容となっている。

国立国語研究所「方言文法全国地図 第二集(活用編1)」(91・3、大蔵省印刷局)は、平成元年(一九八九)六月に刊行された第一集に続くもので、本集には動詞の、終止形・連体形・否定形・命令形・過去形の各活用形に関する四五枚の言語地図と、参考図としてへ透視版調査地点番号地図)一枚及び「別冊 解説2」が収められている。地図の記号は、語形を分析して色・形・大きさなどを考慮して決め、色は六色の多色刷りによつて示した。基本的方針は第一集に同じであるという。本地図集によつて主な動詞の活用形及び活用形式の相違が全国規模で一覽でき、きわめて貴重な資料として、諸家の研究に益すること大であると言えよう。

第一集に関しては、今期、①佐藤亮一「方言文法全国地図・第一集」を刊行して——その特色と問題点——(90・3、フェリス学院大学国文学会「玉藻」25)があり、これは担当者自身による、調査・編集の両面から反省と今後の課題について述べたものであり、率直かつ貴重な意見である。また、②柴田武「書評 国立国語研究所編「方言文法全国地図1」」(90・9、「国語学」162)では主として編集方針、すなわち言語地図のあり方に関し、言語地理学的立場から批判を加えた。この②の一部については、その後柴田氏自身「富山方言の主格助詞ヘナ」について(91・12、「国語学」163)において訂正書評を行った。柴田氏の書評に対し、③小林隆「方言地図の方法について」(柴田武氏「書評 国立国語研究所編「方言文法全国地図1」」(91・3、「国語学」163)は、この方言地図が示そうとする最大の特徴である「資料性の強調」を中心として論じながら、さらに、一般論としての言語

地図の示し方を含んで、研究上の位置づけと、そのあり方と言う根本問題にわたって論じており、聞くべき多くの内容が込められているように思う。①②および③で示された問題はそれぞれ重要な面を含んでおり、今後、言語地図の作成とその本質に関して論議の深まることを期待したい。なお、提案された一部に関しては、早速に今回の『第二集（活用編Ⅰ）』に採用され、記号の色を識別しやすくするなどの改善として現われた。

小林 隆「方言東西対立分布成立パターンについての覚書」(91・3、  
『国立国語研究所報告』12)は、現代方言における東西対立分布が、どのように成立したかを『日本言語地図』と文献資料によって考察したものである。東西対立の成立パターンは、東西対立をなす語形の、放射の中心地、放射の順序、伝播の範囲、の三つの観点から見る、四つの異なるタイプが想定される、とした。今後の探求が期待される。

中本正智「日本列島言語史の研究」(90・5、大修館書店)は、その中心的研究対象の具体例には多く琉球方言を取り上げ、日本の諸方言を視野に入れつつ、方言間の相違を歴史的観点から考察しようとしてきたものである。研究方法は、比較言語学と言語地理学を中心として、意味論などの言語理論を援用して考察している。音韻・文法・語彙の体系記述を通して、その実態と分布と歴史を明らかにしようとした意欲が感じられる。

言  
方  
奥村三雄「方言国語史研究」(90・9、東京堂出版)は、著者永年の研究の総まとめである。方言国語史の方法を文献国語史に対立する方法論的概念であるとの立場から、具体的には音韻・アクセント・文法・語彙にわたる言語事象の、共時態分布相から史的考察を加え

て系譜を明かにし、また文献資料をも有効に活用して総合的に考え、方言国語史の可能性を追求した、手堅い労作である。

久野眞「連母音の融合と助詞の融合」(91・1、  
『日本語論考』桜楓社)は、方言の音韻体系をもれなく調査するために、必要にして十分な調査項目はどうあるべきか、の研究である。ここでは、その具体例としてへ連母音の融合及び助詞の融合が各地方言でいかに共通語と異なる音節を作ることになるかを、実例を挙げて具体的に考察した。

雑誌『日本語学』は一九九一年四月号で、  
特集「戦後の言語変化」を編集し、次のような諸論考を載せた。

「現代の言語変化の研究法」永瀬治郎、「戦後日本人の「話す」生活」芳賀 綏、「方言の中の変化——戦後の新方言——」井上史雄、「社会言語学から見た言語変化」真田信治、「現代の外來語の流入」米川明彦、「国語研究所の調査に見る言語変化」江川 清、「東京語アクセントの変化——大正から昭和まで——」佐藤亮一、「情報化と言語変容」荻野綱男、「国語史から見た現代の変化」渋谷克己。

方言の研究を考えるとき、「言語の変化」はまさにその実態であるから、これらの諸論考は、それぞれの分野からの成果と問題点を示して、方言研究にとつても時宜を得た特集であった。

諸星美智直「奉行所における吟味の言葉——「反正紀略」巻九所収の控を資料として——」(91・10、  
『日本近代語研究』1)は、表題の資料が、評定所留役による吟味の様子を、指定辞にダ・ジャ・デゴザリマスを用いて綴った均質的な口語文脈での記録であるとする。そして、大名・旗本たる奉行・留役の会話文中には江戸の町人層の日常語に近い語法が指摘でき、また、僧侶は公的で改まった固い表現が認められる

とする。これは近世武家社会の多層的な言語生活の一端を解明する貴重な資料として、ユニークな研究と思われる。

## 二、記述的研究

鎌田良二「姫路市方言」(91・3、「甲南国文」38)は、アクセント・音韻・文法・語彙に関しての記述であり、アクセントは中学生の、音韻・文法・語彙については成人の話者による実態調査である。さらに「動態調査」と称するものがあり、これは多人数の中学生に、特徴的方言形について調査し、その変化の傾向を考察したもの。氏には、また「福井・敦賀・洲本三市方言の動向——大阪弁の広がり——」(91・3、「甲南女子大学研究紀要」27)があり、場面調査・語彙調査・文法調査を行なって、方言変化の実態を数量的に示した。

木部暢子「笠沙町方言について」(90・2、「笠沙町の民俗 下巻」へ鹿児島県川辺郡笠沙町教育委員会)は、当該方言の音韻・アクセント・文法等の、その特徴に関して記述した手堅い研究である。また、氏には「鹿児島方言の語法——「カタ」と「ジ」——」(90・12、「九州大学文学部・筑紫国語学談話会「筑紫語学研究」創刊号)があり、詳細かつ緻密な考察を行なった。

久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫「琉球竹富島の方言」(90・3、「國學院大學日本文化研究所)は、共同研究の見事なチームワークによる成果であり、音韻・音対応と音変化・アクセント・文法の記述的研究と昔話の採録が揃い、竹富島方言の全容が理解される。鼻母音や、喉頭化子音の設定など新解釈を提唱する。大野眞男には関連して「南琉球における親族名称の記述と比較」(90・2、「岩手大

奄美沖永良部島・徳之島方言の場合——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)があとて新しい分析法を示した。

音声・音韻に関しては、

渡辺修平「弘前市方言における特殊拍識別について——調査2(選振肢方式)から——」(90・1、「日本語論考」桜楓社)は、北奥方言の特殊拍は共通語に比して短く発音されるが、これらの特殊拍が方言話者自身にどのように識別されているか、またその実態から特殊拍の特質がどのようにとらえられるかを考察した。より深い解明が期待される。

斉藤孝滋「岩手方言における語中子音有声化現象——音環境・語彙的事情・世代の観点から——」(90・12、「東北大学」「国語学研究」30)、「岩手方言における語中子音鼻音化現象——環境・語彙的事情・世代の観点から——」(91・3、「千葉大学」「語文論叢」19)は、それぞれ、精緻な観察を加えてこの方言の音声的特徴を説明しようとした考察である。

篠崎晃一「千葉方言におけるカ行子音の分布と変化」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、千葉県下五〇地点の臨地調査の資料から、語中のカ行音の実態とその諸相の解釈を考察したものである。全県的視野からの、千葉方言の実態解明の貴重な研究の一つである。氏にはまた、「千葉県における動詞・形容詞の活用」(91・1、「へ都立大学」「人文学報」28)があり、県下四地点の記述的研究を示した。

馬瀬良雄「信越の秘境秋山郷の方言音韻の分析」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、秋山郷方言の音韻的特色をヘシラビーム方言(柴田武の用語であると解釈し、精密な音素分析による音韻体系と、共通語との対応関係を明らかにした。また、方言で書かれた古文書の解説を通して、方言音韻の体系的特徴が理解される。さらに音韻の

年代的推移についても考察を加え、秘境を浮き彫りにした。

木川行央「談話資料に現われる母音連続——伊豆松崎方言の談話資料から——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、母音連続における融合現象の実際について、静岡県東部の伊豆松崎方言の談話録音資料を用いて考察した。

有元光彦「五島列島・下崎山町方言の動詞の「テ形」における音韻現象について」(90・12、「国語学」163)は、(1)共通語の「テ」に相当するものとして、「[テ]」や「[デ]」の現われる場合と促音や撥音の現われる場合とがある。(2)動詞は、語幹末分節音の違いによって、その二つの形を取るものと「[テ]」や「[デ]」しかとらないものとに分かれる」と言う現象について、数年にわたる当該方言研究の蓄積を背景とし、多くのデータを示しつつ考察した。

木部暢子「鹿児島県瀬田町方言の語中有声化について」(90・3、「薩摩路」34)及び「鹿児島および東北方言の語中力行タ行の子音について」(90・12、「語文研究」70)は、従来考えられていた、(本来無声子音であったものが、後に有声子音となった)と言う立場のいわゆる「有声化」現象について、違うのではないかとと言う論である。すなわち瀬田町と知覧町両方言に詳しい観察と考察を加え、東北方言を含めて「語中の力行タ行の子音は有声音であるのが本来の形だった」とする問題提起である。今後の探求を期待したい。

名嘉真三成「南琉球方言のハ行音」(91・1、「日本語論究」桜楓社)は、特異な音韻変化をしている南琉球方言の、ハ行子音の実態とその変化過程を示した研究である。宮古・八重山の諸方言は各方言毎に複雑な実態を示しているが、その変遷もまた各方言の音韻体系の特色に強く関わっていることを考察している。

アクセントに関しては、

森下喜一「地域別・年齢別にみた青森方言アクセントの変化とその過程について——1・2音節名詞を中心に——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、青森方言アクセントの共通語化を含むさまざまな変化の相を、地域別・年齢別に詳細に調査し、津軽に比べ南部の方の変化が激しいことを明らかにした。なお、本論の続編に当たるものとして、「青森方言アクセントの型とその変化について——三・四音節語を中心に——」(91・3、「作新学院大学紀要」創刊号)がある。

上野善道「青森市方言の形容詞のアクセント」(91・3、「アジア・アフリカ文化研究」19〈東京外国語大学〉アジア・アフリカ言語文化研究所は、毎年継続的に実施している青森市方言(適切な話者一人について)のアクセント研究の一環であるが、今回は形容詞についての記述である。基本形と活用形の考察に加え、一拍語から九拍語にいたる約九〇〇語の資料を示し貴重である。

大西拓一郎「宮城県志津川町方言の用言のアクセント——動詞の変化形を中心に——」(90・3、「東北大」『日本文化研究所報告別巻』27)は、表記の方言に関し、動詞の活用形を含む多くの変化形のアクセントを分析・解釈した論考である。また、アクセントからイントネーションを取り出す新しい試みも見られ、さらに多くの実態の解明が期待される。

稲垣滋子「アクセント型の支配力——東京都2地点の比較から——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、談話の録音資料の分析により、自然談話の中で、アクセント型がどのように実現するかを検討した。型相互の実現の割合、語種や語の使用率や話す早さ、拍の構造などから、東京都の中心部台東区と東京西部の檜原村の比較によって、方言に

よる相違を明らかにしつつ検討している。

中井幸比古「京都府における、いわゆる垂井式語アクセントについて(1)」、(2)「90・12、91・12(國學院大學)『国語研究』54、55)は、垂井式アクセントと称されているものの相互関係、及び垂井式と東京式アクセントの系譜・変遷について、実態調査の資料を詳細に示して考察した。

山口幸洋も『全国方言談話資料集』2(91・12)の中で、「滋賀県浅井町周辺アクセント調査報告」を発表し、垂井式アクセント資料を示した。

久野マリ子「沖永良部島和泊方言のアクセント——長さがアクセントの型を示す方言——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、和泊方言アクセントの実態調査をもとに、その特色を明らかにした明快な論考である。このアクセントは特殊拍(長音・撥音・促音・漸弱母音のi)などの音環境により、種々な音声相を示す(三型のN型アクセント)であり、長音がアクセントの型と関わること、さらに拍数が増えると二型アクセントに解釈出来ること、などの特色を明らかにした。

文法に関しては、

内間直仁「沖繩言語と共同体 ウチ社会の意識とことば」(90・4、社会評論社)は、沖繩の地域社会を一つのウチ文化をなしているものとして、このような視点から琉球方言の表現法を見るべきだと提唱する。豊富な方言の例を駆使しての具体的な考察には、永年の文法を主とした調査・研究の蓄積がものを言っており、氏の「琉球方言文法論」を新しい観点から形成している観があり、説得力がある。

秋山洋一・本学方言調査会「甲府市を中心に見た山梨県方言の仮定表現に関する調査研究——見ロバ」「出ロバ」などの言い方について(中)・

(下)「90・3、91・3、「山梨県立女子短期大学紀要」23、24)は、八九年の(上)に続くものである。分布図からの検討、数量的分析、隣接方言との関連研究等、その実態をふまえた考察である。

馬瀬良雄「秋山郷方言のくたとくけ」(90・9、「信濃」489号)は、共通語の過去形は「くた」しかないが、当該方言の用法について、同じ形式を持つ静岡方言や、文語文法との対応を考慮し、当該方言の「くた・くけ」の文法的意味の分析を緻密に検討した。

今村かほる「推量形の表現価値に関する試論——長野県下伊那方言「ラ」「ズラ」と「ダロー」「ノダロー」との比較をめぐって——」(90・5、へ昭和女子大学大学院「日本文学紀要」1)は、当該方言の推量「ラ・ズラ」の意味するところについて、先行諸説をふまえての考察であるが、今後の探求を待ちたい。

中本正智「沖繩奥武島方言の表現法」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、沖繩本島南部に位置する玉城村奥武島方言の表現について、具体的資料を提示し考察した。すなわち、意志・勧誘・希望・推量・様態・伝聞・否定・過去・回想・アスペクトの諸表現について記述した。

野原三義「琉球方言助詞の若干の問題」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、すでに先年「琉球方言助詞の研究」を著して、助詞研究に一家言を持つ筆者の具体的な問題指摘であり、琉球諸方言にわたっての用例を上げつつ相互の関係をふまえて考察した。

### 三、言語社会学的研究

真田信治「地域言語の社会言語学的研究」(90・2、和泉書院)は、「方言Ⅱ地域言語」という視点から、著者自身のフィールドによつて

得たデータをもとに、社会言語学の立場から言語動態を追究したものである。言語行動・語彙の社会的諸相・言語変化・言語接触・言語修得等の観点から考察を加えて、研究方法・今後の展望にも及んでいる。氏にはまた、「標準語はいかに成立したか——近代日本語の発展の歴史」(91・1、創拓社)があつて、示唆に富む論を示した。

相澤正夫「北海道における共通語使用意識——富良野・札幌言語調査から——」(90・3、国立国語研究所『研究報告集』11)は、富良野・札幌両市とも共通語使用意識がきわめて強いが、これは、一方では「北海道共通語」に対する強い志向性として表れている。そして他方では、自らのことばを「全国共通語」と同一視する方向へと導くこと

にもなつているとする。言語の意識調査として多くの知見が示される。氏にはまた、「生きているアクセント規則の検討——東京語の単純動詞とその転成名詞の場合——」(91・3、国立国語研究所『研究報告』12)がある。

大野眞男「岩手方言のイメージ分析」(90・12、「いわて地域科学」4)は、岩手方言話者(大学生)による、東北六県と北海道・東京・名古屋・京都・大阪の方言と比較してのイメージ調査である。

尾崎喜光・真田信治「奈良県西吉野・大塔村におけるアクセントの実態と成立過程」(91・3、大阪大学文学部日文学研究室『日本学報』10)は、奈良十津川村方言(東京式A)との関係で、地理的に北部に当たる当該地区方言アクセントの実態、およびその成立過程を分布地図を示しながら、考察した。なお、関連して真田信治・宮治弘明「奈良県西吉野・大塔地域の言語調査報告」(90・3、大阪大学文学部日文学研究室『日本学報』9)がある。

方

言

加藤和夫「地域差・年齢差からみた京都・兵庫北部地域における

方言の動態——文法事象を例として——」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、近年、地域言語の共通語化の激しいうねりの中で、京都周辺の伝統を基底に持つ方言の変化動態はどうであるか、を課題としてプログラム的手法を用いて調査した考察である。

備前 徹「外国人の近畿方言受容意識」(91・9、「国語学」106)は、近畿地方の大学に留学している「大陸」「台湾」「韓国」の学生たちが近畿方言をどのように受け入れているか、について調査を行い、それぞれの違いを明らかにした。日本語教育の面で貴重な資料となる。

久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫「四つ仮名方言の動態と意識——高知県中村市・安芸市の数量調査——」(91・3、國學院大學『日本文化研究所』)は、当該方言のいわゆる「四つ仮名」についての発音と意識の数量調査の結果を整理したもの。資料は、一人につき見開き二ページずつ、一八二名の話者のデータが記述されている。

岸江信介「昭和」における大阪方言の動態」(90・12、「国語学」)は、伝統的大阪市方言の共通語化と方言独自の変化の実態を、世代差・男女差などから考察したもの。地域言語の中でも有力な方言であるが、共通語化の勢いはここにも大きく反映しているようである。氏はまた、井上文子氏と「泉南市岡田地区の方言」(91・3、「泉南市民俗資料調査報告」1)をまとめ、大阪府言語地図を含め方言形態の調査と、談話の文字化資料を報告した。

神鳥武彦・高永 茂「方言に対する好悪の意識——東広島市高屋町における自然発生的集落居住者の場合——」(90・3、「国文学攷」105)は、言語の意識調査として貴重な考察である。前稿の「社宅居住者」との比較により、広島方言に対する好悪の意識に相違があつた。両氏にはまた、

「方言使用と生活環境——社宅居住者と自然発生的集落居住者——」(91・7)、「広島文化女子短期大学紀要」24)の論考がある。

#### 四、言語地理学的研究

柴田武「糸魚川言語地図 中巻」(90・3、秋山書店)は、昭和三二  
年以降、柴田・グローター・ス・徳川宗賢、後に馬瀬良雄を加えた四  
氏の共同調査研究による成果が、永年温められていたが、いよいよ  
出始めたのであり、先年の「上巻」に続くものとして刊行された。  
パソコンを駆使しての、典型的な解釈地図であり、完結を待ちたい。  
なお、「上巻」については、大橋勝男「書評 柴田武「糸魚川言語地  
図 上巻」」(90・3、「国語学」100)があり、きわめて適切かつ細部に  
わたる紹介・批判が述べられている。

飯豊毅一の指導のもと、昭和女子大学方言研究会がまとめた「日  
本語方言の研究2 房総南端部方言調査報告1」(90・3)、「日本語  
方言の研究3 千葉県房総南端部方言地図集」(91・10)がある。前  
者は、音韻・文法・語彙・表現法等に関する報告であり、後者は言  
語地図と分布の説明である。

永瀬治郎「よそで生まれた新方言の伝播過程」(90・2、「専修国文」  
46)は、伊豆半島を調査地域として、首都圏で出現している、いわゆ  
る「新方言」の使用率を実態調査し、それを伝播過程として数量的  
に分析した報告である。言語の伝播過程のあり方を考える上で参考  
となろう。また、氏は、「東西方言の境界線付近の現在と将来——岐阜、  
長野県境の方言について——」(90・10、「専修国文」47)でも言語伝播の問題  
を、共通語化とその他の点から、実態調査によって追究している。

広戸 惇「出雲方言とその周辺」(91・3、「出雲市民文庫」出雲市教

育委員会)は、小島の方言、魚・昆虫・小動物の方言、植物の方言、  
出雲を中心とする言葉等、主として方言語彙の分布と歴史を平易に  
述べたものである。氏の大著「中国地方五県言語地図」「方言語彙の  
研究」等を示された研究成果を背景にしつつ、古辞書や最近の研究  
も参照して、雲伯方言を中心に時には全国諸方言をも視野に入れつ  
つ出雲方言の特色を述べている。

彦坂佳宣「東海西部地方における対称代名詞の分布と歴史」(90・  
12、「国語学研究」30)は、当該地域の今日の分布と過去の文献から、  
近世以降の対称の代名詞の歴史を明らかにしようとした研究であ  
り、この観点からの研究はもっと多く出てほしいものである。

鏡味明克「川の言語地理学」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、方  
言境界の地理的条件の一つとして大河川があるが、その典型的な、  
木曾川・長良川・揖斐川が相寄って伊勢湾に注ぐ河口域の三重愛知  
県境は、アクセントの東西対立で代表されると共に東西両方言の境  
界線でもある。ここは平野部の中で、もっぱら河川だけの特徴を示  
す。しかし、河川にも変遷がある。これら、河川の改修などで方言  
の境界性が異動することの実態を、河川境界の特異性として考察し  
たもの。氏にはまた、「形容詞の表現」(91・3、「大分県史 方言編」)  
があつて、大分方言の形容詞について語構成の面からと、意味的記  
述を行なった。

高橋顕志「四国言語地図——一九九〇——」(91・3)、「四国言語地図  
——一九八六——」(91・9、高知女子大学国語学研究室)は、独自にプロ  
グラムを開発し、パソコンによって作図したユニークな言語地図で  
ある。調査対象の原則は、「中学二年生男子」と同居している「祖父」  
で、若年層と老年層の二枚の地図を見開きにして示した。資料は通



信・アンケート調査によって収集した。

パソコンによって言語地図を作成する方法の開発は、以前から徳川宗賢、荻野綱男、福嶋秩子などによってそのソフトが公開されているものの、まだ必ずしも十分に利用されているとは言えない現状ながら、柴田武や高橋顕志らの独自の開発を含め、今後いよいよの発展が期待される（筆者自身、現在「新・東京都言語地図」の作成中であるので大いに関心があるところである）。

高橋顕志「四国方言における「テオル系」アスペクト辞の諸相——四国言語地図より(1)——」(91・3、「高知女子大学紀要 人文・社会科学編」39)は、上記の言語地図により「テオル系」アスペクト辞の具体的な語形の地理的分布を明かにし、それらの歴史的関係について考察した。氏はまた、「食ペライチャオ」の言語学——土佐弁による国語史入門——(91・9、高知女子大学国語学研究室)をまとめた。本書はきわめてユニークな発想から具体的な高知方言を資料として、国語の歴史を述べたものである。

加藤正信・斉藤孝滋・村上雅孝・武田拓・神戸和昭・半沢康「南部・伊達藩境地帯における方言分布調査の報告と考察」(91・3、へ東北大学)「日本文化研究所研究報告別巻」28)は、東北大学文学部国語学研究室で、毎年実施する共同研究の報告である。音韻・アクセント・文法・語彙の各項目にわたっての分布地図を示し、藩境地帯の方言対立と変化の実態を考察した。

大橋勝男「関東地方域の方言についての方言地理学的研究2 表現法事象分布論編」(90・2、桜楓社)は、著者が先年刊行した「関東地方域方言事象分布図(全三巻)」の研究編であり、ここから永年にわたる研究成果の全貌が次第に明らかになってこよう。氏はこの他、

毎年「日本諸方言についての記述的研究」を新潟大学教育学部研究紀要に連載され、精力的に地道な記述を続け、また一方では学生を指導してその研究報告「方言の研究」をまとめる活躍が目立つ。

江端義夫「方言会話の方言地理学的研究は可能か」(90・2、「広島大学教育学部紀要第二部」38)は、談話とは異なった概念として「方言の会話」を考え、例えば「朝の挨拶ことば」が、どのような点に注目した発想で表現されるかを、《会話》の種々相による地理的關係として見ようとする《方言類型論地理学》を提唱し、具体例を取り上げて考察した。地理学的研究の対象として新しい視点であろう。

また、岡野信子編の「下関市北九州市言語地図」(91・3、梅光女子院大学方言研究会)がある。

## 五、談話・会話の分析的研究

金沢裕之「明治期大阪語資料としての落語速記本とSPレコード——指定表現を中心に——」(91・12、「国語学」10)は、大阪落語について明治中期の資料として速記本、末期の資料としてSPレコードがあり、そのリストを示した。これを大阪方言の資料として考察し、指定の助動詞「や」の発展形態を明らかにするとともに、これらの言語資料としての性格についても検討した。

久木田 恵「東京方言の談話展開の方法」(90・9、「国語学」10)は、談話の文体について、その進める方法として地域言語により相違があるとの立場から、東京方言と関西方言との比較研究を行なった。東京方言では「ダカラ」「ホラ」「ネッ」等によって感情をこめて展開し、関西方言では接統詞「それで」「そして」類の頻用で客観的説明を累加していく展開であることを明らかにした。

杉村孝夫「唐津かね話」の構造分析」(91・1、「日本語学論考」桜楓社)は、昔話を談話の一形態ととらえ、これを形態論的分析の手法により構造分析を試みたものである。方言談話の構造的特色を見るために参考とすべき考察であろう。

## 六、語彙・方言資料などの研究

善理信昭・和泉善子「農業語彙の研究——神奈川県高座郡寒川町を中心とする養蚕語彙について」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、農村の生活語彙であった農業関係の語も、最近の急激な生活様式や農業そのものの変化によって失われようとしているものも多い。現時点において体系的に記録しておくための調査研究はいろいろな面で必要なことである。本研究はそのような視点から当該地域の特産であった養蚕に関する方言語彙収集についての考察である。

野林正路「語彙構造の記述——山梨県牧丘町赤芝の(煮物・煮べ・煮付)類」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、氏の感性に照らした語彙研究の実践であり、きわめて厳密かつ緻密な意味の分析による語彙体系の記述を目指す。氏は毎月「意味論研究会」を開いて実態調査に立脚した意味体系の構築に意欲的である。

沖 裕子「国語辞典」に収録された「方言」(91・1、「日本語論考」桜楓社)は、三省堂「新明解国語辞典第四版」に方言及びそれに類する注記のある見出し三百数十項目をとり出して検討し、国語辞典の中の位置付け、記述の内容、等について種々の問題点を指摘した。

森下喜一「栃木のおもしろ方言」(91・3、栃木の葉書房)は、栃木県の特によく日常的な方言を取り上げ、啓蒙的に方言に対する認識を広め

ようとした。内容は、動物・植物・遊びに関する方言、生活に関する方言、日常使う動詞・形容詞など、ことばの使い方、などの項目を設定して解説したものである。平易な文章で、栃木方言の特色をよく表わしていると言えよう。

秋山正次・吉岡泰夫「暮らしに生きる熊本方言」(91・1、熊本日日新聞社)は、県内四七地点を探訪して各地で生きた談話を収集し、その特色を適切に解説しつつ、後半では方言の概説の中でさらに今後の研究課題を指摘した。

日高貢一郎「宮崎における方言グッズ」(91・3、大分大学国語国文学会「国語の研究」15)は、これまであまり研究対象として取り上げられなかった、方言にちなんだみやげ物などを中心にして、そこにはどんな方言が取り上げられているか、その表記には問題はないか、また誰がどうやって選定しているのかなど、について考察した。多くはその地元ではなく、他地方の業者によって制作されていることなど。この研究は、方言が現代社会の中で、どのような働きをしているか、を多方面からみていくための一考察で、新しい視点であると思う。氏にはまた、「大分方言三十年の変容」、「可能表現」(91・3、「大分県史 方言編」)があつて記述的研究が示されている。

植村悠太郎「資料・種子島の方言語彙(1)」(91・3、鹿兒島短期大学南日本文化研究所「南日本文化」23)は、先ず当該方言の概観・音韻・文法の体系的記述を示し、語彙体系の考察を深めている。完成を期待する。

佐藤亮一「監修「方言の読本」(91・8、小学館)は、「日本方言大辞典」(全三巻・小学館刊)所収の方言地図から、一三〇点を選定・分類し、解説したものである。さらに各ページのコラム欄には方言に関

する話題を適切に取り上げ、簡潔ながら有益な読み物になっている。また、巻末には、方言研究の入門的解説があつて、方言字の研究分野の概観が示されている。(読本)とする所以であろう。

## 七、方言集・方言辞典など

赤城毅彦編『茨城方言民俗語辞典』(91・9、東京堂出版)は、編者の四十年近い努力になる労作と言う。記述の内容は、県内の地域的色彩を細かに反映し、特に民俗に関する解説に特色がある。編集に当たっては宮島達夫氏が全面的に協力し、パソコンによる割付原稿を作成し、印刷の版下もこのプリンターによつたとのことである。

このことから、パソコンによる言語資料のデータ化とその研究方法などの面で示唆に富む発言がある。すなわち、宮島達夫『茨城方言・民俗語辞典』の印刷と検索(91・10、『日本語学』明治書院)で示された内容は、その実践から生じた貴重な発言と思うからである。

さらに、徳川宗賢・佐藤亮一他編『日本方言大辞典』(全三巻、小学館、89・3)が刊行され、東条操・大岩正伸両先達の遺業を受け継ぎ、さらに充実補完して完結を見たことは特筆に値する。このことについて、小林隆の詳細かつ適切な書評が『国語学』165(91・6)に掲載された。一方今期、平山輝男を編者代表とし、大島一郎・久野マリ子・久野眞・大野眞男・杉村孝夫を編集委員とする『現代日本語方言大辞典』(全八巻、明治書院の第一巻が刊行された。この大辞典に収録されている方言は、全国の重要な七二地点の方言について昭和四九年以降、四十数名の全国の方言学者との共同研究によつて体系的に実態調査を実施して収集したものであり、その資料を基にして編集されている。したがつて前述の『日本方言大辞典』とはそ

の編集方針も内容も全く異なるもので、両大辞典はそれぞれ特色を分かち合つて存在理由を持つものである。全八巻の完結を期待したい。

## 八、おわりに

以上、はなはだ偏つた展望となつたが、今期の諸家の成果をふまへつて、これからの方言研究について感じたことをまとめると次のようになろう。

1、全国的にみて、地域言語の変化の急激であることがどの研究を見ても多かれ少なかれ研究テーマに含まれているが、その観点が地域社会との関連で考えられている考察が目立つ。この事に鑑み、方言資料として今後記録して残すべき努力が一層必要であろう。現時点の各地域言語の正確な把握という点から、地道な記述的研究の蓄積がいよいよ大事ではないか。

2、1での観点とともに、過去の方言資料(文献資料)に関しても、地域開発の急激な進行を見る現在、やはり急ぎ地域毎に発見・発掘して資料として整備する努力が必要だ。(小林芳規氏の角筆資料の発掘、迫野虔徳氏らの地道な努力を学ぶべき。)

3、これからの研究の視点として、方言を、現代日本語の地域性と社会的多様性の双方から見据えることが、さらに重要であるということ。

4、方言文法に関する研究の発展が「方言文法全国地図」の今後の完備に伴い、いつそう濃密に期待できよう。

5、パソコン・ワープロの利用による研究の促進は、大いに期待できると思われる。資料・データの蓄積と検索、言語地図の作成な

ど。

6、はからずも、この「方言展望」担当期間内に、国語学会名誉会員平山輝男氏に対し、政府は、氏の永年にわたる方言研究・国語学研究を中心とする功績を認めて、平成二年（一九九〇年）度の「文化功労者」として顕彰した。このことは、現時、方言研究の隆盛をものがるものとして、ここに記憶に止めておきたい。

（付記） 本稿をまとめるにあたり、諸論考のリスト作成に関して、久野マリ子氏・田中宣広氏の協力を得た。ここに御礼を申し上げる。

—— 神田外語大学教授 ——